

2019年度

第8回

コロキウム講演録

真の国際性とはなにか？

～世界に羽ばたいてゆく博士学生に期待すること～

講演者：西浦 みどり

西浦みどり（株式会社アマデウス
インコーポレイテッド代表取締役
社長、山梨大学客員教授）

講演日 2019/12/17

2019年度第8回早稲田大学実体情報学博士プログラムのコロキウムでは、「真の国際性とはなにか？～世界に羽ばたいてゆく博士学生に期待すること～」の題目で、西浦みどり様からお話を頂きました。

■ 講演者ご紹介

西浦 みどり (にしうら みどり) 様 ご略歴



東京都出身。12歳より英国で教育を受け帰国後、総理府各種インタビュアーとしてキャリアをスタート。日本広報ならびに企業の各ニーズに応えた斬新なアイデア提供をはじめ、省庁委員、企業コンサルティング、宇宙航空研究開発機構役員待遇アドバイザー広報・国際担当、理化学研究所ダイバーシティー・デザイナー等を歴任。また、お茶の水女子大学にて、グローバル女性リーダーシップ教育の一環として、独自に編み出した、「歴史から考える国際関係＋コミュニケーション論」を英語で説くとともに、理工系ポスドク学生たちの視野を広げるためのリベラルアーツ教育にも従事してきた。山口大学でも長年教鞭を執り、学生たちの指示が高い。山口大学では一昨年から、「東アジア文化論」の集中講義も担っている。現在、山梨大学客員教授もつとめる。「日本の科学研究の失速を食い止める会」共同代表。英国王立音楽大学日本大使など。新聞・雑誌連載、トーク番組司会、オピニオンリーダーとしてテレビ出演も多数。

■ 講演要旨

研究者・技術者であっても「発信力」を高めることの重要性をご自身の海外経験や国内大学(お茶の水女子大, 山口大), JAXA, 理研におけるキャリアに基づいて力説されました。また、真のコミュニケーション能力とは何か、それはどのようにして身につく、身につけるべきかということについて質疑が行われました。講演後には参加学生との記念撮影も行われました。

■ 講演内容

グローバルコミュニケーションズは、今や英語圏では広い、ハイレベルな位置づけでの広報という意味です。広報は、パブリックリレーションズだと思いませんか。確かに、この20、30年ぐらいは、パブリックリレーションズ、あるいはパブリックアフェアーズと言っていました。よく政府、JAXAや理化学研究所で使うのはパブリックアフェアーズですし、パブリックリレーションズは企業で使われることが多いですね。ところが今は、パブリックリレーションズという表現は海外、特に欧米では使われなくなりました。理由は、“真偽あやしい口先売り込み”という質の悪いPR担当者が増加し、この重要不可欠な専門分野の評価を下げてしまったことが第一の理由です。結果、PR業界の従事者がちゃらんぼらん、真偽に劣る、軽いといったふうにより一段低く見られるようになってしまいました。

では、本来の、内外を問わず、真の広報戦略や発信、企画、そのコラボ、そしてその技術、幅広い人脈、ノウハウやエキスパティーズを持って人々やマスコミにも幅広くアピールする、更に言えば、社会風潮までも創り上げる、トレンドセッター、そういうことを総合的に「グローバルコミュニケーションズ」、専門家は、「グローバルコミュニケーションズ・エキスパート」と、言うのが近年のスタンダードです。それを覚えておくのはとても有益なことです。そして、皆さんが勉強をしてこられた科学技術の分野では今日、研究だけでは不十分で、それを広める、世界に発信する、そのためにはどうするかというところが重要ファクターの一部にもなります。

やり方として、グローバルコミュニケーションズ・エキスパートの人を連れてきて、その専門分野だけをお願いすれば技術者、科学者、各博士たちは研究に勤しむことができます。企業も同じです。ただ、なかなかホンモノ、実のあるグローバルコミュニケーションズの専門家を見つけることは難しい。なぜなら、そうしたことに疎い人々にはなにが、あるいは誰がホンモノか、正統かの見極めがつかないからです。私がCEOをつとめるコンサルティング会社では、様々な企業、団体、機関から次のような相談を頻繁に受けます。触れ込みだけで雇ってみたら中身がなく口先だけ、辞めさせられなくて困っている、あるいは、そういう過去の失敗があったので今後をきちんとしたかたちでお願いしたい・・・このような相談は少なくありません。判断ミスだけでなく、いろいろな障害があるので、真の専門家にたどり着けないときには自分である程度、タックルしてみる必要性に迫られる場合も多いでしょう。

宇宙航空研究開発機構(JAXA)は、「はやぶさ」帰還がきっかけとなりやっと世間に認知されるようになってから、早十年が経ちました。これはすごいことなのです。若い皆さまは、JAXAなんて前から知っている、当たり前だと思うかもしれませんが、私が広報・国際部を国際基準に少しでも近づけるために嘱託契約で入ったときには認知度が低い時代

で、なんと「NASDA」（過去の名称）、あるいは米国のNASAの出先機関ですか？と聞かれることまであったのです。今では幸い想像しにくいですが。マスコミの方々からは、広報の態度が高慢無礼だ、煮え湯を飲まされたといった苦情エピソードを聞かされ、お詫び行脚から始めた時代でもありました。技術畑出身者には雄弁でない人が多いということもあるでしょうが、過去の失敗からでしょうか、全体的に組織が過剰な卑屈さで固まっているかと思うと、逆に、「ボクの、ワタシだけの宇宙」、「入ってこないで、自分だけが知っている」といった上から目線、排他的傲慢さが感じられる、広報の真逆だと、外部からご指摘をいただくことが多かったのです。そうした、率直なご批判は、取材させて貰えなかったり意地悪されたりしたら困るからと封印して我慢してきたそうで、いわば外部から来た私の到来を、“待ってました”とばかりに、本音を聞かされました。そうした後ろ向きの雰囲気は、世間の常識とは一致しませんでしたから批判されて当たり前なのです。しかしながら、ようやく実態が浮き彫りになって改善点が皆にとって明確になったことは正しい一歩です。特に若い部員達は、「これではいけないのでは？」と、感じながらも、具体策が見えないまま余計なことをすると歯車の中での流れを乱すことになり評価が低くなってしまふなどの典型的役所的なあり方に縛られている人もいました。ですので、色々なことを前向きに推進し始めると嬉々として頑張ってくれる人たちに救われました。一方で、それらの目に見える改革、特に外部から高評価を受けると様々なサボタージュを展開してくる、いわば抵抗勢力？それほど勢力でもないですが、グループもいました。どこの組織でもあることでしょう。改革、変化、改善、新発想などという概念は、役所系の組織ではネガティブに捉えられるんですね。企業だって同じですよと、当時、某金融機関の役員さんから言われましたが、いずれにせよ、改革が必要ということは、今までしていたことがダメだから・・・という何とも機械的な考え方をする人が上司の中にひとりでも存在したら、改革に着手をしても上手くいきませんし、常に好機を逃すことになってしまいます。経営トップからは、改革を推進し、少なくとも世間のスタンダードになるように、国内だけでなく、国際的にもプレゼンスを高め、JAXA研究開発をアピールし、適した人材を育てるよという依頼を受けてのことですから、何とかやり遂げようと思いましたが、嬉しいチャレンジで、前向きに有難く受けとめました。JAXAは、素晴らしい技術者たちがひしめく、開発やイノベーションマインドに長けた人材の宝箱のような面もあります。今までスポットライトを浴びなかったエンジニアの人たちに光を当てて輝いて貰うといった、私の個人的な希望で推し進めた側面もありました。そういう方々は、いざ、広報、発信、古い言い方では啓蒙普及となると見当が付きませんし、関心も薄いので、本来、広報部が頑張らなければいけない。ただ、当時は、広報部員も嫌々な人も多く、解らないし苦手な分野だから何もしない、あるいは、勘違いで邁進してしまう、そんなことが横行していたから正統派専門家の導入、テコ入れが不可欠だったわけです。

JAXAで約5年間、広報と国際部を一から世間の価値観、国民の意識に沿うように立て直す、更に世界にも日本の技術や交際社会、人類に貢献をアピールすることを使命として役員待遇に就任、改革していきました。多くの職員、特に若い世代は純粋な人達も多く、一緒に夢を描けるような前向きでポジティブなマインドを持てるよう根本的なレゾナートルから意識改善していきました。当時の部員で、その後別部署に異動している人が、私が退職してから時を経て当時を振り返り、「西浦さんの下で働いたときが一番楽しかった」と、言っていたと某幹部から聞かされたときは、コンサルタント冥利に尽きると思いました。嬉しかったですね。話を当時に戻すと、結果、徐々に技術畑以外の仕事でも面白さを

見出し、意欲的に発展できる人あり、一方では、何も変えたくない、外から来た“よそ者”が世間、あるいは大所高所で支持を受けるのが悔しいといった、狭い根性でサボタージュしてくる人ありで、決して平坦な道のりではありませんでした。ネガティブさで周囲にも悪影響を与える人の特徴は、仕事のできない人ですね。自信のなさの裏返し、中には根拠のない自信に満ちあふれて傲慢無教養という勘違いな人もいましたが、意に介さず目的達成だけに集中して、皆が明るく楽しく周囲にも同様の雰囲気“伝染”するようにつとめました。その結果、あるときから散々苦情を言われたマスコミの方々からも、「JAXA、変ったね、ちゃんと対話できるようになった」、「良くなった」等々、嬉しい言葉をかけられるようになりました。すると、批判よりも応援してやろうという雰囲気が生まれ、今ではJAXAはすっかり“人気者”になったと思っています。そこで、誤った方向に暴走したり、「開かれたJAXA」を取り違えて不適切な片棒を担がされてしまったりということのないように、勘違いをせずに品格を保って行ってほしいと、「宇宙ファミリー」としては切に願うばかりです。宇宙飛行士で現JAXA理事でもある若田光一さんが、当時、私に贈ってくれた数々のあたたかい言葉の中でも次のメッセージが大きな励みになりました。「西浦さんがJAXAに新風を吹き込んでくれた。我々もやりやすくなった。ありがとう」です。今日は時間の関係で様々な珍エピソードは省きますが、確かに昔のJAXAには「なぜ？」と首をかしげたくなる様々な不思議”自己規制“のようなものが横行していて、前進を妨げていたところもありました。今では、見える形としては広報誌が素晴らしく生まれ変わり、蔭ながら後身達にエールを送りサポートし続けています。若い人たちも中堅所となり変らず交流を続けてくれるので嬉しいです。頼まれ事も少なからずで、人の紹介からアイデア、ヒント、なんでも惜しまず提供しています。



イタリア外務省外交官訓練機関SIOIにて宇宙ディプロマシー講演

2年ほど海外の大学や国際機関、この写真のように、イタリア外務省外交官育成機関SIOIなどで講演やセミナーをしてから理化学研究所に入りました。ダイバーシティーということがちょうど注目された時代でしたが、ここが一番弱いと外国機関や要人たちからも指摘されていたので、必要はあったと思います。理研では、研究者はイノベーション・デザイナーであってほしいといった代表トップの発想から、ダイバーシティーを推進する私は、ダイバーシティー・デザイナーと拝命しました。これがきっかけで、ダイバーシティー推

進とはなんぞや、何をどうしてどのように達成したいかといったことを幅広く解説させていただけるきっかけとなったのです。このようなこと自体、まさにイノベーション的発想ですね。ダイバーシティーと一口に言っても、日本では本来の意味合いである、ルーツ、ジェンダーよりも、女性科学者、研究者をより多く育てる、輩出するといった目的が一丁目一番地にあるわけです。どこでもそうですが、100年の歴史を誇るトップ機関としての良い面と悪い面が存在しますので、権威ある理化学の研究者、専門家集団の中で、私ひとり、研究者でもなければ科学者、化学者でもない、グローバルコミュニケーションズ・エキスパートとしてハイレベルな学者たちの広報を意識しながら女性学者たちが働きやすい、昇進しやすい環境とは何かを追求してプロモートしていく手助けをしました。幸い、経団連トップなど、ビジネス界からの支持に恵まれて、「西浦さんにうってつけの仕事だ」「イメージ的にもピッタリだ、理研にも新たな空気が必要」などと背中を押していただきました。が、組織とは、特に歴史の長いところには、様々な美しいとは言えない思惑を抱くトラブルメーカーもいるわけです。二枚舌三枚舌も当たり前で、少なくない異例な事態に困惑するときもありましたが、研究者、学者たちは純粹で、様々な分野の彼らから学んだことを社会に幅広くアピールしていくことの重要性と意義をも感じ、優れた才能人材、発明、発見などを広めることを楽しみました。皆さん、これを言うと驚くのですが、理研は日本でも最初に託児所を所内に作った機関なのです。もちろん、託児所だけでは根本的な問題解決にはなりません、昔はかなり前進的組織だったことは確かです。今までに人生を振り返ると、私が恵まれたと思うのは、経済界（経団連会長、企業トップ、幹部）や教育界（大学学長、総長など）からメンター的な応援者たちに導かれてご支持も得てきたことです。この歳になってもそうですが。ですので、驚くような苦悩、または想像を絶する陥れ等にあっても、常に駆け込み寺とでもいいでしょうか、相談に行くと適切なアドバイスやエールを頂戴してきました。そのお陰で、発狂せずに？いつも明るく前向きに研鑽を積み、精進が楽しく頑張れるのだと思います。コミュニケーション能力に助けられることも多く、皆さんにもその大切さを伝えることによって、磨かなければと思って欲しいのです。ネガティブをポジティブに転換するためのヒントを授かる、あるいは、ひらめくように誘導してもらうことが貴重な教えとなるわけです。感謝の念だけでなく、そうしたことに気づくよう自覚を持って欲しいです。一方、若い人たちは、私のところに相談事で来ます。逆の立場になるわけですが、素晴らしいメンターたちから最良の教えを受けた経験が役に立ちます。

近年、ほとんどの企業が欲しがるとは、一に、「コミュニケーション能力のある人」だそうです。ここで、少なくとも二つのことがわかります。ひとつには、いかに、我が国では「コミュニケーション能力」に長けている人、長けるまでいかになくても、取りあえずある人、というのが少ないか、希、貴重な存在かということ。二つ目には、もう、コミュニケーション能力なくては通用しない国際社会になっていて、何かの知識さえあればいい時代ではなく、発信・説得能力やコミュニケーション能力そのものを否定できないということ。昔のように、寡黙が善、沈黙は金？といった、日本ならではの価値観ではこの複雑化された国際社会の中で健全な競争力を発揮しながら先端を目指し、憎まれないように立ち回って協調できる場所はするといったこと無しでは、生き残れない時代だということ。ところが、実態は、自分のできないことに長けている人、国内外を問わず要人から支持される人、イコール、コミュニケーション能力に長けている人を疎ましく、妬ましく感じて排除したい・・・などといった非常に内向き、暗くネガティブな発想を抱いて

しまう人、平たく言うと低レベルの嫉妬心に操られてしまうひとが意外と多いということにも注視しなければいけません。周囲の人々の成功を絶賛しつつ、自分を上手にアピールできるようになることも、大いに様々な形で利益をもたらすことに繋がるのです。何にでも、発展性、生誕性の根本的メリットを追求し、現実的な合理的発想を徹底すれば自然に道が開けて面白いくらいに前進します。

世界へ出て行くと、どこの国でも”I am a global communications expert” と言えば通じます。王族であろうが大統領、総理大臣、メガ企業トップであろうが、前述の自己紹介で敬意を表してくれて、丁重な扱いを受けますね。そうでない人もいるかも知れませんが、私は運も良いのかもしれない。一方、日本で、「私はグローバルコミュニケーションズ・エキスパートです」といっても、まず理解されません。???が、聞いた人の表情に出ています。解説しなければと、真の国際性とか発信力とか、そういう話から始めると、単に語学が堪能なのね、と解釈されてしまうのです。この分野は、たとえ語学がそれほど得意でなくても、秀でている人もいますし、逆に流暢、堪能でもスキルに劣っている人もいます。もちろん、両方が抜きん出ている初めてホンモノのグローバルコミュニケーションズ・エキスパートと言えるわけですが。

逆を言えば、仮に語学が堪能でも、ただ中身のないことを永遠と喋っているというだけで、全く目的、ゴールを達成できずに成果が得られない人もいます。悲しいことに、語学力に乏しい人はそうしたことは判断できませんから、取りあえずペラペラ喋っている人を“デキる人”と勘違いして頼ってしまうこともあります。逆に、外国語が流暢でなくても、中身や真意を伝えることができる人もいます。ですので、語学力の足りなさをコンプレックスに感じる必要はありません。

そもそも、なぜ、コミュニケーション能力（語学力ではありません！）を高める必要があるのか。国際性豊かな人とは、いかなる人をも軽んじることなく真剣に向き合うことが、最初の一步、正しいスタートなのです。真の国際性を身につければ、巧みにできるようになって、自ずと国際性が高くなる。では、なぜそういうことが必要なのか。それは、私たちは自分の出身、自分のルーツ、思想、理念、信念を聞く側が正しく理解し、もっとこの人と語りたい、知りたい、と思わせることができれば良い仕事もできますし、平和維持ですら困難ではなくなるからです。国際性、コミュニケーション能力を高めることによって成果が得られる確率は高くなります。まずは、上級レベルをもってアピールできないと相手にされないのです。自分のことをとにかく上手にアピールして、相手のことにも耳を傾けてきちんと知ろうとする心を持ち、そういった努力、姿勢が見える人でないと話になりません。そこで、アピールだからと勘違いして、今風に言うところの“話を盛る”といった嘘、誇張があってはならないですし、やたらと押しつけがましく宣伝ばかりするのも逆効果です。さりとして、データ発表会ではないので、正確さだけではつまらない、聞く耳を持たせない話になり、せつかくのよい要素や材料も無駄になってしまいます。求められる理想的な姿とは、正確さ、品格、ウイット、ユーモアのセンス（お笑いとは違います）、歴史や国際関係にも知識があり、相手を思いやる優しさと嫌みのない自己主張とのベストバランスを心得、誇り高いことと傲り高ぶることとは違うように、sense of prideを持ちながら他をrespect（敬う心）する気持ちのゆとりを備え、そして、穏やかではあっても信念は静かに貫く強い意志、常に、相手から、ジェンダー、ルーツ、年齢に左右されずに学ぼうとする心を持つ、その上、芸術文化にも精通していれば、真のグローバルコミュニケーションズ・エキスパートと言えるでしょう。色々な国で、そのようなスーパー人

材との出会いに恵まれてきました。有難いことです。私も、そうした達人たちのお手本に見習って研鑽を積まなければと、常に意識しています。芸術文化、すなわち、リベラルアーツ教育の必要性の高さが顕著です。とかく、世界の檜舞台といいますか、大所高所では、前述の条件を満たし、その上、身なりのセンスも美しい強者達が犇めいているのですから、我が国の“グローバル人材”育成は、ロケットスピードをもってあたっていても遅すぎるくらいです。

例えばよく見る光景は、海外の学会、企業レセプションなどの集まりで、発信力、コミュニケーション能力が低過ぎて、夜の懇親会でも日本人同士で固まって、早くその場から逃れたい表情がありありと周囲にもバレてしまっていて、そうこうしているうちに終わり・・・あー、勿体ない！なんのために来たのか、というものです。あとはやたらと名刺を配るだけ。まるで、配りきったら早く退席できて賞品でももらえるのかと思っていると見られても不思議ではないくらいで、何もアピールできていない。100人、日本から来たのに、全然プレゼンスが感じられなかった、何のためにあんなに大勢で参加したのか？どうしてあなたは欠席したのか？と、後日、私に文句を言ってきた外国要人もいました。小国、財力のない国でも、飛び抜けた発信力、コミュニケーション能力を持つ人がひとりいれば、ブロークンで、ひどい発音の英語であったとしても巧みに相手の心を掴んで好印象を与え、さらには交渉事も有利に運べることもあるのです。全ての人が、大物大使や外交官たちのように卓越したスキルを持ち合わせているわけではないですし、または、真のグローバルコミュニケーションズ・エキスパートではないわけですが、常に自助努力を怠ってはいけません。相手の気をそらさないコミュニケーションができると、その国に一度行ってみたい、その国の人が好き、ということになり、美しい関係が築ける第一歩となります。

ですから、自分は外交官ではないから日本をアピールする必要はないと思ったら大間違いです。自分がどんな分野の勉強をしようと、博士号を取る・取らないは別として、研究専門分野の研究者であっても、自国についてアピールすることが、自身のカルチャーであり、自分がどういう背景の人間なのかということの世界に出たときに証明することになります。というのは、背景、個性、カルチャー異なる人たちが数多くいるので、そこで自分を知ってもらうには専門分野は別として、まずそこから入らなければならないのです。そういった意味で必要なわけです。ジャパンプライド、ジャパンビューティー。日本は何を誇りに思えるか。何を誇りとして人に話せるか。いろいろな意味でどこが美しいのか。常に意識を高く持ってほしいです。

世界に出て行ったときに、今では世界共通語が英語になってきましたので、大抵の国では何とか意思の疎通はできるはずですが、日本が誇りに思えることをまず英語でよりよく発信するというにかかっているといっても過言ではありません。通訳を雇える人は、通訳して貰いながらも自分の目線や態度で存在をアピールする必要があります。いずれにせよ、いきなり自分の研究してきたことを何か言おうとしても、聞く耳を持ってもらえません。学術講演は別ですが、原稿があって、それを読んでも通用します。大切なのはその後、アフターの時間、懇親会や個別対話の時に評価されると思ってください。

では、ジャパンプライドにはどのようなことがあるでしょう。長い歴史の中では、負の遺産もありますが、誇れることもたくさんありました。時間がないのでここでは割愛しますが、皆さん、目を向けてみてください。一方、物作り、開発、発明分野では身近に皆さんも知っていることが多々ありますね。小さくても日常生活では大活躍な身近なところで

はトイレの洗浄ノズルがありますね。海外では電動ビデと受けとめられて、フランス、ベルサイユ宮殿の観光客用トイレにも欲しいといった相談を受けましたが、話を聞いてみると寄付して欲しいといったことでしたので成立しませんでした。前述の理化学研究所では、近年だけでも113番元素の発見もありましたし、次世代スーパーコンピュータ京もあります。東京スカイツリーでは、日立製の高速エレベーターに乗りましたところ、やはり日本の技術者は優秀だ、日本はスゴいと、少し安心しました。もちろん、中国に凄まじい勢いで追い越されていっていますが。ただ、この日立エレベーターは、ピーという音一つ聞こえてこない。何の揺れもない。まばたきしたらもう、29階に着いている。一般のビルで例えると100階の高さだそうです。そういうエレベーターです。しかも、江戸情緒の風景が季節感のあるパネルで飾られています。本当に感動体験でした。

リニア中央新幹線は山梨に試験場があり6月に試乗してきました。写真を撮ろうと思っても、早過ぎて写真に写りません。待合室で、今、試乗したばかりのリニア車両が通り過ぎると聞いたので、早くシャッターを切ろうと思っても全然間に合わない。それぐらいの早さです。これも優れた技術ですが、一方、狭い国土で環境的な議論もあることは無視できませんが、技術面だけを考えれば素晴らしい。技術開発、発明は多々ありますが、汚水浄化淡水化技術も大切なことです。宇宙でも、尿を浄化して飲み水にしますから、高レベルな浄化水技術は日本です。さびないネジ、そしてLEDもしかり、リチウム電池、使い切りカイロ、眼鏡フレーム、化粧筆、ナノスキンケア。終了時間が迫っていますので多くを省略しますが、物や技術ではない解りやすいところでは、治安の良さ、親切度、勤勉さ、正直度などでしょう。あくまで比較論になりますが。そして、こういった文化も大切です。健康維持に役立つ和食、食品ロスが防げるお弁当。今、BENTOとって、ヨーロッパの小さな国でも普通にスーパーで売っています。私がイギリスで育った子どもの頃は、お刺身のことを説明すると、生の魚を食べるのかと気持ち悪がられて生食可能なお魚を売っている店は一件だけでした。今は、街角のスーパーやコンビニでもお寿司(sushi)が売られています。いろいろな国の人たちがランチタイムになると列を成して買って行くのですから時代は変わりました。ジャブジャブにお醤油に泳がせるような食べ方はやめてほしいと思えますけれども、好きずきですから仕方ありません。それほど世界の文化が入り交じっている、クロスカルチャー現象ということです。もっとも、インドから来た人が日本のカレー屋を見て驚くことはないのかもしれませんが、生の魚は、かつては別モノ扱いだっただけです。今では、ランチ寿司はもとより、会員制高級社交クラブでも、オペラの帰りに立ち寄って紳士淑女がシャンパーニュやSake(サケ)日本酒を片手にバーでお寿司をつまんでいるのですから、正装した姿に生の魚がなんともお洒落にさえ見える今日です。

それから、世界が真似できない最高峰の技術が日本にはあります。お隣の中国の技術開発は目覚ましいものがありますし、航空分野ではアメリカの独壇場といった部分もあります。現に、中国では折りたためるPC、液晶画面が商品化されていますし。でも、今のところ、世界がまねできない最高の技術と言え、日本の潜水艦なのです。島国ですから、防衛しなかったら、いつどうなってしまうか分かりません。日常的にわれわれが乗るものではないので身近には感じないかもしれませんが、国防のためにも潜水艦は非常に重要です。どこにも負けないということは、イコール、世界中が日本のこの潜水艦の技術を欲しがっているということです。軍事では機密情報が多くありますからそれぞれが造っていますが、日本の機械や部品、組み立て技術は世界一なのです。宇宙技術では、物資を輸送する補給機、世界が日本を頼るISS輸送無人船、この写真の『こうのとり』です。これも13発

ぐらい送り出しているのでしょうか。環境にも配慮していてデザイン性にも優れたものです。優れた技術性能だけでなく、グッドデザイン賞も輝きました。

特に、「このとり」についてはJAXA時代に四六時中アピールしていましたし、雑誌や新聞にも寄稿しましたので周知と認識していました。にもかかわらず、海外では知らない人が結構いました。「日本の技術だったの・・・イギリスかと思った」「アメリカが開発したと思っていた」、そのように言われることもありました。以前の発信力の欠如が尾を引いて・・・ということでしょうか、適切な自己アピールが他国に比べると奥ゆかしすぎたとも言えた時代が長かった国が日本です。そもそも、広報という言葉すら昔の日本語にはなかったのです。明治時代に伊藤博文公が考案した訳らしいのです。情報と言う言葉も同様、インフォメーションを情報としたそうで。元々、日本人のDNAの中にはなかった概念というところですから、苦手でも仕方ないですね。日本の文化では自分を前に出すのはよろしくないこと、自慢話と受け取られたくないといった自意識過剰なところがあります。他の成功や功績、優れた面を心から讃えるといった、広い心を持つ習慣が封建社会では育たず、身分の上下だけで物事が成り立っていたのが一因かも知れません。ですが、世界へ出て行って健全な競争力をもってして勝ちぬき、平和な心をもって複雑化された国際社会を円滑に乗り切る・・・そして一緒に環境問題や戦争紛争なき社会の実現に向かって協力しあうという考え方、根本は己を知り、相手を知る。そしてアピール、発信力、相手に自分の立場、考えを少しでも理解してもらって共感もしてもらおうということが大切です。ですから、特に理工系の皆さんは、物や発明については、これはメイド・イン・ジャパンで元は日本の技術だと、日本発ということを手前にアピールしてください。

日本人はどこに行ってもきちんとゴミ拾いをして帰ります。ここは、他国の人々にない行動なので、日本人が目立つ行為です。これを揶揄して、『日本人はゴミ拾いしか脳がないのか』と書いた某国の新聞もありますが、そのときに日本のマスコミや重要人物は黙っていました。言っても、せいぜい、きれい好きなのでとか、清潔一番とか、そんな程度です。いや、そうではない、これはこういうことなのだと、その機会を捉えて最大限より良く発信しなくてははいけないのです。ささいなことだから流してもいい、言わせておけ・・・ではダメです。世界に出て行くと、いちいち自分の立場やスタンスをアピールすることは不可欠です。日本は流すのが好きです。何でも水に流す。ちょっとしたことは流す。日本の中ではその曖昧、さっぱりさがうまくする場合もありますが、世界ではなかなかそうはいきません。例えば、ゴミ拾いという行為は、単にきれい好きとかそういうことではなく、元はといえば禅修行に根ざした尊い行為なのだと間髪入れずに日本の新聞が社説かなにかでお返したらよかった。これは、精神修養の一環でもあり、平和な心、平常心を促し保つための一種の修行でもあり、空気中に漂う邪悪な思想をも浄化するお清めでもあるのだと、どれだけの日本人が説明できるのでしょうか。学生であっても社会人であっても、マスコミ関係者にも頑張っって欲しいところです。

何でも説明しないと駄目なのが日本以外の国々、すなわち海外です。外国の方々は、多くの場合、ZEN、という目の色が変わります。何をそんなにエキサイトしているのかなと、私も若いときは思いましたが、要するに、ZENとか、サムライなど、ミステリアスな世界へのあこがれ素材がたくさんあって、関連した本やマンガを読んでいるわけです。お寺で修行や座禅をやってみたいと思っている外国人は多いです。禅修行、イコール「自分もゴミ拾いしようかな」となっていくのです。きれいにして、よそさまに迷惑を掛けないように清潔に保つのは、日本特有の美意識、善行です。ですから、建築現場でもそういうことが

当たり前。海外でも日本の自衛隊、PKFおよび民間企業が関わった工事現場だけは、小枝一本落ちていなくて整理整頓もされています。自衛隊のマナーの良さも評判です。その上、環境に配慮して、汚水まで浄化して捨てていたというので現地の人々がビックリしたということですが、日本ではそうしたことは特に外地にいるときこそ意識を高く持ち、迷惑をかけないようにすることが息をするのと同じくらい自然なことなのです。

そうした尊い行為、理にもかなった善行を、ただ自己満足のようにやっているだけでなく、発信力を持って海外にもさりげなくアピールできたらどんなによいでしょう。プラスな展開が生まれて、より良い波及効果も出るはずです。

それから、他国の人々から日本についてありとあらゆることを聞かれます。ですから、幅広く様々な事に興味を持ち、例え浅い知識でもあったほうが有利です。きちんと答えられないと、「本当に日本から来たのか」「日本人か？」と聞かれたという話を耳にしたことがあります。若い人たち、それぞれの分野にアカデミックに秀でたポスドク学生グループと歌舞伎座に行ったことがあります。生まれて初めて歌舞伎座に足を踏み入れたという人が多くいたので、勿体ないと思いました。ですから、いろいろなことに興味、好奇心、意欲を持って社会へ出て行ってほしいです。

日本と西洋文化は真逆なところが多々あります。例えば満月の捉え方の違いです。国によっては、三日月が出ると不吉な予感といいます。ある国では、これは吉兆だといい、全然違います。満月でいえば、オオカミが出て襲われるから不吉だという国もあるし、満月はめでたいことで、美しいから皆で愛でるという国もあります。それほど多様性があるということです。それを理解した上で、自分の文化ではこう考えるということを手順に説明できる力を備えたいものです。

そして、言葉の違いです。言葉の響き、意味合い、その受け取り方の違いがあります。今、パソコンで打てば辞書が出てきて、瞬時に意味や引用例などが出てきますね。でも、シンプルな言葉は別として、少し込み入った感情表現となると辞書やパソコンに表示される答えは、実はまったく違うものもあれば、まあまあOKレベルのものもあります。日常的に使われていて、その現地の人々が理解する正しい表現のニュアンスは、辞書で引けるものと違うことが多いのです。英語でもそうですから、他の国の言葉だとなかなか難しいものがあると想像します。そういった技術もどんどん改善していく時代になってくると思いますが、何でもAIに頼ったり、鵜呑みにはできません。もう一度、やってみるといった日常的に軽いことであっても、リベンジなんておかしな「日本英語」が定着しているようですが、そのまま外国の人に軽い気持ちでリベンジなんて言おうものなら、「なんと恐ろしい人種だろう、日本人は！」と、たちまちに誤解されてしまいます。「リベンジRevenge」、すなわち「復讐」という言葉は、余程の怨念のこもった一世一代事のようなケースでない限り使いません。

例えば、「迷惑を掛ける」というと、日本では武士の世界だったら切腹物なくらい、極めて深刻な、絶対避けなければいけない悪行です。ところが、「迷惑を掛けた」をフランス語に訳しても、「ああ、そう」という感じです。それほど重みがない。失敗することは誰でもあるというふうには捉える程度のもので、つまり、ちょっとミスをするのと、日本で言うところの「迷惑を掛ける」とでは、まったく意味合い、ニュアンスが違うわけです。そういうことからしても、表現の捉え方、感じ方の違いがあります。ですから、英語だけ話せても肝心なところで役に立たない、誤解が生じるといった場合が少なからずあるというのは、こういうことなのです。

よくあるのは、論文を世界にも発表したいから英訳して発表する時のことです。皆さんには気を付けてほしいところです。ちょっとしたニュアンスで随分違うことがあります。例えば、日本語で自分の論文や研究成果に基づいた申請書などを書いて、それを翻訳者に英文化してもらったとします。それを関係各所に提出しても、望んでいる返答はないかもしれません。それはなぜかという、真意が正しく伝わるように訳すには、ほとんどの場合、データ以外は意識しなくてはいけないからです。意識というのは、ひとつの単語、あるいはセンテンスを直訳しても何が言いたいのかといった真髓な部分は伝わらないので、真意を汲んだ上での言い回しに変えなければいけないのです。そこが、ドンピシャでない限り、せつかくの研究成果やそれをどのように捉えているか、今後の希望や心情など、半分も伝わらなかつたりします。非常に大事なことです。多くの場合、データがモノを言う論文でさえそのような傾向にあるのですから、まして私信や他の分野のあらゆる文書、身近なところでは映画の字幕でさえ、度合い、発信者、環境を勘案、受け止め側の同様考慮を照らし合わせて違いを租借した上での意識ができれば、痒いところに手が届く感だけでなく、有益な展開をもたらすはずで、翻ってその反面は、言葉やコミュニケーションの在り方次第で絶体絶命となることも容易くあり得るわけです。外国語での表現能力は、ネイティブな人なら誰でも備わっているわけではないので注意しましょう。日本人でも、一風、変った喋り方をする人、何を言っているのか理解に苦しむ話し方をする人、語彙が乏しい人、アバウトな物言いをする人、人を不快にさせる物言いをする人、等々、ありとあらゆる話し方をする人がいるように、外国人でも同じことなのです。話し方は、学歴やアカデミックレベルにも関係ありません。

それぞれの国の文化、背景、歴史を学んで、現状も把握した上でコミュニケーションを図らなければなりません。ですので、前述の全てがムリでも、それぐらいの気概を持ってベストを尽くすべきです。様々なトピックでコミュニケーションをはかるときに、自分は技術者、あるいは科学者で、自分が研究しているテーマに関係ないから当てはまらない、必要がない、海外にも行かないから必要ないと思わないでほしいです。

発信力、コミュニケーション能力に自信がないと思うと、ついつい引込み思案になりポジティブに行動できないと感ずること、ありませんか。また、その逆で、根拠のない自信を持って周囲を妨げ、自己認識の誤解から悪影響を振りまく人もいます。これは言いにくいですが、特に昔の日本男性に多かったのではないのでしょうか。戦時中はそうした不幸な事例も多かったと思います。緻密で冷静な分析がなく、根拠のない自信を持って突き進むと全てが崩れ去ってしまいますから、正しい根拠に基づいた自信を持つこと。別に自分が発明したものでなくても、日本人として誇りに思っているのです。発明、発見、新技術も素晴らしいですが、それだけではなく誇りに思えることもあります。善が根底にある気持の在り方、気概、人柄、人間性、そういうことも考えます。世界に誇れる日本、まだまだあります。私たちの環境のために正しい情報、知識を得る。環境を抜きにしては、何もできません。身動きできないのです。地球が崩れ去っているわけですから、何をやるにも、まずこれをみんなで考えつつ、戦略的向上・成長を遂げることが可能です。そして世界を知ることです。



科学博物館イベント

この写真は、「ミスターはやぶさ」といわれた、川口淳一郎さんです。川口さんのお陰でJAXAも幅広く認知され、見直され、明るい話題が功を奏したかはわかりませんが、若干の予算も付くようになりました。サイエンスミュージアムでイベントを開催し、全国タウンミーティングなどでも講演やディスカッションも提供しました。昔は、サイエンスミュージアムでイベントというとお子さま向けが多かったのですけれど、近年は老若男女を問わず、社会人を対象に開催しています。



川口氏著書



財界特別賞授賞式にて

そういった積み重ねによって、ビジネスマンではない川口さんが歴史ある雑誌『財界』主宰の「財界賞・経営者賞」の中で、「財界特別賞」にも輝きました。「はやぶさ 世界初を実現した日本の力」（日本実業出版社）という本も私が楽しみながらプロデュースさせていただきました。川口さんの本は面白いですね。特に技術者にはたくさんのヒントがあると思います。この本は、中に私との対談ページも挿入しました。良い思い出です。

この写真は、種子島から打ち上げされるのを待機中のH-IIAです。お陰様で、今では打ち上げ成功立100%を誇っていますが、昔は衛星を搭載したロケット打ち上げの失敗が続いたこともあったそうで、NASDAという組織名時代には職員はバッジも付けずに出掛けていたというくらい、厳しい目に晒された時代もあったそうです。税金の無駄遣いと言われて肩身の狭い思いをしていたとは信じがたいくらい、今では揺るぎない誇れる技術があるということです。



米国NASA
ゲステンマイヤ有人宇宙探査共同代表



イタリア宇宙庁パティストン総裁とローマで



フランス宇宙庁ルガル総裁と



英国宇宙庁パーカー長官とロンドンにて



ドイツ大使と宇宙庁ラインケ駐日代表

こちらの写真は、各国の宇宙機関です。中央が米国NASA、左がイタリアのASI、それからフランスのCNES、イギリスUKSAとドイツDLR、そのトップ、あるいは上官たちと対談をしているところです。『財界』誌面で、「西浦みどりの宇宙の窓から」という連載を執筆していたときに掲載しました。JAXA退職後もこうして世界中の宇宙関係者が交流を続けてくれるのは有難く嬉しくもあります。



無菌室で衛星「しずくGCOM-W1」案内

こちらの写真の女性は、当時、フランスCNESの国際関係役員、私のカウンターパートだった人。この衛星は、第一期水環境観測衛星、後に民間公募で「しずく」と命名されましたが、打ち上げで種子島に移動されるので筑波宇宙センターから送り出されます。こちらの写真はバイミーティングと案内をしたときですね、懐かしい。

現役中は、定期的に世界各国でテーマ別の国際会議やシンポジウムがありましたから、外地をまわりました。この写真のように、日本の宇宙飛行士が宇宙にある国際宇宙ステーションに旅立つときには、カザフスタンのバイコヌール、ロシアのモスクワに滞在して打ち上げ前後の広報・国際関係業務を遂行します。今でもまだ、人を宇宙に送り出すにはロシアのロケット、ソユーズに乗せてもらう必要があります。日本では、宇宙に物資は運べても、人は送れる技術はないと言われていますが、それはどうでしょうか。技術的には大丈夫だと思いますが、人を運んで万が一のことがあったら国民のコンセンサスが得られないからしないとか、予算がないからとかといった話を聞いたことがあります。真相は判りませんが。こちらの写真は、ウィーンの国連宇宙空間平和利用委員会(COUPUS)ですね。堀川康議長が初めて誕生したことは、日本にとって名誉なことでしたし、アシストする機会に恵まれたことも水を得た魚ではないですが嬉しかったです。議長は、各国の参加者の主張を見事に対処していくわけですから猛獣使いでないとできません。私の役割は、休憩時間中のコリドー宇宙外交と、小委員会に議長の代理として出席をし、各国の言い分、注文、提案を聞き、取りまとめて後で議長に報告するということです。夜になると、世界参加国の方々とローカルワインを酌み交わしながら社交、主張、提案の半々でしょうか、永遠と続くので、心身共にタフでないと。特に胃袋、肝臓は丈夫で助かりました。親に感謝です。同時に、色々な文化の料理やワインにも精通していることと、単純に食いしん坊でもあることが助けにもなりました。

今や宇宙といえば、軍隊を持たない日本でも宇宙における国防を考えざるを得ない時代になりました。フランスは、宇宙庁から宇宙省に組織を格上げし、国際宇宙協力機関に加盟していない中国にいたっては、独自の宇宙ステーションを持って独自に活動しています。ですから、日本にとっては同盟国で協力して作った国際宇宙ステーションが破壊されて、自国および協力国が飛ばした衛星が破壊されて何の電波も受信できない、飛行機も止まる、船も止まる、真っ暗になって機能不全になっても、中国だけは独自の設備で活動、サバイバルできるということです。そこから想像すると、いろいろなことが考えられると思います。

実は、皆さんにとって社会に出たときに、一番プラスになること、役に立つことは、ある2点のことと思っています。それらを脇に置いておく。全部、捨て去るということではありません。少し忘れる。バックシートに置いておく。その2点のことというのは何だと思えますか？とても簡単なことです。1点目は固定観念、2点目は先入観です。この2点を思考回路から外すことで、物事が鮮明に見えてきます。これはビジネス界、政界、官界、学术界、医学界、ありとあらゆる世界で共通します。学生でいるときにはこれらの2点からくる偏見がそれほどでなくても、社会人になって時がたつと、いつの間にかどんどん偏見という垢まみれになりかねないのです。常に外していく努力と意識を持たなければいけないのですが、ちょっと油断をしていると逆に偏見が更にねじれて色濃くなっていき、それが破壊的な嫉妬心に繋がっていくことも希ではありません。偏見と同じくらい自己破壊力にあふれる悪要因は、妬み嫉みです。日本が今後、更なる発展を遂げるためには、成長を続けるには、心に潜む妬み嫉みとの決別が必至と、三菱ケミカルホールディングス会長の小林喜光会長が著書「危機感なき茹でガエル日本」経済同友会共著（中央公論社刊）でも説いています。良い本なので、ぜひ読んでみてください。



講演後、ライシャワーセンター所長カルダー教授と

先入観とはいろいろありますが、この写真にあるように、ワシントンDCにあるハーバード大学の日本研究所、エドウィン・O・ライシャワー日本研究所、通称ライシャワーセンターで二年ほど前だったでしょうか、講演をしたときです。そのときは主に、未だ蔓延る日本での女性に対する偏見、特に社会で仕事をする独身女性に対する偏見はなぜか、世界と比べてどうか、どうしたら変えられるかなどについて話しました。たいへん興味を持っていただき、たくさんの勇気づけられる質問や感想をちょうだいしました。時間の関係で詳しくお話しできなくて残念ですがまたの機会に。

先入観と固定観念が強すぎるため、無意識のうちに偏見という腫瘍が育ってしまったという、極めてもったいない結果は避けたいものです。このふたつの避けたい概念がまったく感じられなかったのが、フランス、パリ政治学院に11年間にわたり年に一回ですが講義をしていた時でした。



パリ政治学院にて講義

この写真は、そのクラスの学生たちとのものですが、フランス人に限らず、異文化背景、多国籍でした。彼らからは、固定観念、先入観は一切感じられなかったですね。いつも終了後、彼らに引き留められて、rue St. Guillaumeの脇の小さなカフェで更なるヒートアップした議論に花も咲き、花火も打ち上がりました。男女同等、彼らの考え方、疑問や目標を聞きながら私が学ぶことも多かったです。毎回エキサイティングではありましたが、タイトなスケジュールで空港から直行になるときもあり、さすがに後年は疲れが出て担当教授に食事に連れ出してもらって、教授宅で奥様の手料理に舌鼓をうちながらリラックスさせてもらいました。お嬢さんがコーヒータイムになるとソファでヒソヒソ話をしてくれて、私にロマンスの相談をするのです。まったくお門違いと言いますか、聞く相手を間違えているとは思いましたが。こんなところでも、コミュニケーション能力は役立つのです。それは、何度も言いますが、語学力ではなく、聞く心を持つ、理解しようと努める、ということです。

私は、冒頭の御紹介にもありましたように、グローバルコミュニケーションズのエキスパートとしてアマデウスインコーポレイテッドという国際・総合コンサルティングの会社を二十数年、経営しています。おそらく、リタイアするまで続けると思います。どういうことかということ、その会社が潰れずに育っているということです。有名な大手のコンサルティング会社が犇めいている中、なぜ当社のように名もない、しかも個人商店のような会社が途切れることなく、内外の優良企業や様々な団体、機関とコンサルティング契約を結び、お役に立たせて頂けているのでしょうか？それは、ひとつには、他が提供できないノウハウや国際人脈を駆使できるグローバルコミュニケーションズ・エキスパートだからだと思っています。では、そうしたことはどのように培ってきたかということ、先入観や固定観念を捨て去って、必ず対象会社のアセスメントと経営陣のプロファイリングをしています。プロファイリングというのは、人物のみならず、起きている物事、事柄を過去現在を総合的に分析します。それらが常に的確で、正しくできているかどうかで仕事の中身が決まります。契約も決まる。この場合、何が求められているか、どのような言葉が一番ピンと来るのかということも自動的に脳に命令が下らないといけません。それらが外れるとおかしなことになってしまう。歯車が狂った機械にならぬように注意します。これらは必要最小限なことで、あとの重要な事項はメンターたちから授かったことです。今や企業秘密

です（笑）。しかし、相手側に、先入観、固定観念、あるいは、誤情報があるとうまくいきません。クライアントに恵まれてきたとひとりで片付けるのもなんですが、様々な好要素が重なることも重要です。

ですから、発信力、コミュニケーション能力は、全ての根底にあって避けて通れない非常に大切なことなのです。物も言わずに黙々と物作りに励むことに長けている日本人が最も苦手な部分、損をしている部分ではないでしょうか。数々の、人類社会に貢献する発明ができるのに、人と人との間のコミュニケーションズ分野が消極的なために世界の人々に知ってもらえない。そのむなしさを、もったいなさを何とかしなければと、ひとりひとりが意識して考えてほしいです。

90年代に、私が初めて教鞭を執った大学というと、国内では山口大学でした。その講義スタイルは、常に教壇、教室内を歩き回りながら学生たちとコミュニケーションを図り、私が一方的に上から物を申すというのではなく、学生たちにも発言してもらい、また皆でディスカッションをしながら進めていく形だったのです。話し声、笑い声が教室から漏れて聞こえるので、通りがかった学部長には遊んでいるのかなと冗談で言われたこともありました。当時の一部の教員の中にはポジティブとはいえないニュアンスで話題にすることもあったようです。ところが、それから年月を経ると、米国ハーバード大学のサンデル教授が、私と同じ講義スタイルを展開していて、それがテレビでも中継されていて日本でも放送されました。サンデル教授は一躍、日本でも有名になりました。日本に招聘されて、いろいろな所で講演をするようになりました。そうした日本でも知名度が上がったことにより、多くの人々がサンデル教授の変った講義スタイルを知ると、途端にあの授業形式は素晴らしいと話題になりました。コミュニケーション能力を磨く要素も詰まっていたのこのと、大絶賛の嵐です。急に私の教え方を“遊んでいる”のではと言う人がいなくなりました。おかしな話です。固定観念と先入観を振り払っていけば、海外からそういう事例が出なくても、ちゃんとした見方ができたはずです。そこを見誤っているからこそ、自らそうした発想も出ないわけです。盲目的な外国人信奉も問題ですし、同じ内容でも自分と同じ日本人だったら前からやっけていても同様に評価しない。むしろ逆に見る人もいたわけですから。そういうことを全てに当てはめていくと、いかに自分たちが損をしているのか。ザルで水をすくっているような状態ではないかと。皆さんの世代はそういう無駄がないように、大きな心と志で最大限の可能性と運をもたぐり寄せて効率よく生きてほしいです。

■ 会場からの質疑

Q1：お話ありがとうございます。日本人の発信力のなさを僕自身、学会に行って何回も見してきました。そうならないようにしながらも、なかなか難しいところがあります。お話しいただいた内容から自分で考えてみると、自分の国についても正しい情報や知識を持っていないところが主な原因とおっしゃったと思いますが、もしそうであれば、それはなぜなのか。つまり、他の国の人たちは、逆になぜそれができるのか。日本人はどういう気持ちで接していったらいいのか、お考えをお聞かせください。

A1：最初からお願いしておいたのかと見られてしまうような素晴らしい的を得たモデル質問です。いろいろ差し支えがあっても平気で私は言いますが、要するに、戦後教育に問

題があるのです。胸を張って自国を自慢できるような教育がなされていない。繰り返さないためにも直視してディスカッションをしてみなければいけない先の戦争での敗北や非道な部分にはあまり触れたくない、カバーをかけておこうといった後ろ向きな感じがするのです。原爆被害にしても、正面から向き合い考え、学ぶこと、伝えていくことも必要と思います。負を直視することによって、一方、近代歴史の中でも日本が世界に誇れることが少なからずあるのだということを、自国民に教えていないのです。

会場：ないのではありませんか。

A1：それなりにあります。ただ、他国は、そこの教育が逆に長けていますよね。中には、都合よく誇張している国もありますが、日本は自虐に長けているのです。他国では、自分たちがいかに素晴らしいか、自画自賛教育が割と多いですね。それも困ったものですが。そこで、日本が素晴らしいのは、他国のことを国家レベルでネガティブキャンペーンをしないことです。隣国に行くと、ホテルに英字の、いわゆる無料で配られているミニコミ誌が随所に積んであります。ご自由にお持ちくださいとばかりに。そこに日本の悪口がたくさん書かれています。ホテルですから、世界中の人が泊まりに来ます。それを見たときに、見識のない人はびっくりするでしょう。事実と反することもたくさん載っているのに、未だにこんなことを言っているのかと、最初目にしたときには驚きました。そういうものを常に発行して、ネガティブキャンペーンにも国家一丸となって力を注ぐ。その部分が日本の文化の中には幸いありません。日本では、個人的には有らぬ中傷をして平気で人を陥れようとする人はいますが、日本国家レベルで他国に対してそうした悪行はしないだけの品格は備えていると思っています。そのせいでしょうか、日本は世界から若干の信頼といますか、羨望的であることは確かです。

学会に行って、どうしても自分たちだけで固まるとおっしゃっていましたが、それはやはり何をしゃべっていいかわからない、切り出し方がわからないということあると思います。ですから、例えばまず僕の名前はケンジで、あなたの名前は何かという名前か。それから、日本から来たといった自己紹介をします。そのときに、日本について質問が来たら、自国のことを上手にアピールできる知識を持っているか、マインドを持っているかということです。それが少しでもあればそこから入って、それから、実はさっきの講演を聴いてこう思った、自分の研究はこうで、と入ることができます。つまり、まず確立したアイデンティティーをプレゼンテーションしないと、相手にされません。そこなのです。

例えば、今、アメリカ人とか、イギリス人とか、中国人とか、限定して言うのはすごく難しいのですが、だからこそ、あると思います。友人は、ドイツ生まれの生粋のドイツ人ですが、フィリピン女性と結婚し、息子がいます。その息子が台湾から移民したカナダ国籍の女性と結婚しました。彼女の祖母は日本人です。生まれてきた女の子は、すでにドイツ、フィリピン、台湾、日本、カナダとの関わり合いがありますが、この子を、選んだ国籍は別として、なにじん、というひとくくりで考えることはできません。マルチカルチュラルだからです。世界中、こういうマルチルーツの人が増えているので、我々は皆、地球人でしょうが、だからこそ、自身の心をどこに寄せているかで“自国”と思い、それに対して誇りに思うことは良いことだと思います。

ただ、それをナショナリズムとか言われてしまうと、それはまた違いますが、いろいろなカルチャー背景の人と会話をしたときに、固定観念や先入観を持たないことが当たり前

なのです。イタリア人だからちゃらんぽらんだらうとか、ドイツ人だから理詰めであつまらないやつかなと思う人は今どきいませんが、小さなことでいえばそんなことです。そこが結構重要です。心を寄せる自国を知り、他国やそれらの人々のことも耳を傾け理解しようとする心を持つ。そして、他国、当然、自国もですが、歴史や文化も知識として持っていたほうが円滑なコミュニケーションが図れると思います。何も知らないと、地雷を踏んでしまうこともありますから交流が台無しにならないためにも、常に好奇心を枯れさせないでください。そんなところでしょうか。他にはありますか？どうぞ。

Q2：先ほどから偏見や固定観念という話があったかと思いますが。気を付けているつもりではありますが、ときどき間違った見方をしてしまうときがあって、それはポジティブな言い方をしようとする、恐らく事前知識に引っ張られているのだらうと思います。故意にやっているわけではないけれども、今までの知識にある種、とらわれてそういう見方をしてしまうということもあると思います。そういったときに、どういう心構えで偏見にとらわれずに正しくものを見ることができるようになるのでしょうか。

A2：偏見にとらわれないのは、それぞれの人の生き立ちや生まれ持った性格にもよると思います。たまたま私はそういう偏見を全然持たないというか、抜けている人間だったので、世界中いろいろな所に友達がいます。しかも、異なる分野の、これまた様々な立場の友達です。そうした意味では、いつも心をニュートラルに保つということでしょうか。例えば、毎日のように新しい人に会います。何の先入観もありません。外見や肌の色、それからジェンダーや国籍、職業もそうです。それは自分の心の持ちようです。そういうふうに努力していくしかありません。日本という国は、偏見がてんこ盛りの国です。先ず、名刺の肩書きで人を見ますし、態度も変えます。考えられないことです。ベンチャーで財を成した若手経営者が倒産して無一文になったとしても、その人の根本的な人間性は変わらずに見ますし、相對します。大企業の経営トップが引退して名刺がなくなっても、同じにしか見ませんし、態度も変えません。例えば、私は今、ロングヘアをしていますね。ロングヘアをしているだけで、キャリアウーマンのくせになんだ、と見る人がいます。その心の狭さにビックリします。世界中広しといえど、そんなものの考え方をする人はあまりないですね。少なくともG20に入る国々にはですが。海外の女性のエグゼクティブというと、アフロの人もいれば、つるつるにしている人もいれば、いろいろな色に染めている人もいます。だからといって、それでその人の価値を決めることはないですね。日本では、女性の髪が長いというだけで、仕事の場では偏見的な目で見ると同性の人もいるのですから、私は、ひとつのステートメントとしてわざと切りません（笑）。というのは半分冗談で、私の個人的な理由は、小児がんに苦しんでいる子どもたちにウィッグを寄付するために伸ばしています。40センチ取れるぐらいに髪が伸びたら切って寄付して、今、2度目に挑戦しているところです。私はただ自分の好みだけでやっているわけではなく、そういった事情もあります。ただ、人様に説明する必要もないですし、本当に好みだけで伸ばしている人がいるなら、それはそれでよいのです。大きなお世話です。そんな些細な基本的な人権すら女性に認めない国なのではないでしょうか、日本は。とにかく、偏見を持たない。そして、先入観、固定観念との決別は、コミュニケーション能力を高めるという位置付けでは非常に重要な第一歩だと思います。

他にありますか。はい、どうぞ。

Q3：コミュニケーション能力ということですがけれども、大事だろうとは思いますが、最近、コミュニケーション能力といわれるあまりに、中身が伴っていないと感じます。コミュニケーション能力を何と捉えるかということなのかもしれませんが、そういうことによってこの国は地盤沈下をいろいろしていると思うのです。その原因は、そういう上っ面なというか、コミュニケーション能力とみんなが言い過ぎるためにそうなっている考え方もあるのではないのでしょうか。そういうコミュニケーション能力と、先生がおっしゃるコミュニケーション能力は違うのかもしれませんが、どういうところが違うんでしょうか。

A3：全く違います。今、ポイントアウトしていただいたうわべだけのコミュニケーション能力は、本当のコミュニケーション能力ではありません。弁が立つとよくいいますが、ただ愚にも付かないことでもべらべら言える人や、外国語に精通する人だけがコミュニケーション能力が高い人と思いがちです。それは表面的なことなので、コミュニケーション能力を高めるといった言い回しが独り歩きしている最たる例だと思います。本物というのは、中身があって、それをどう最大限上手に伝えることができるか、また発信することができるか。何をもちょう上手というかというと、受ける側が正しく理解して、そしてさらに高度に、受ける側が発信側の意図もそこに組み込んで影響されてしまうぐらいの能力のことを、本物のコミュニケーション能力といいます。

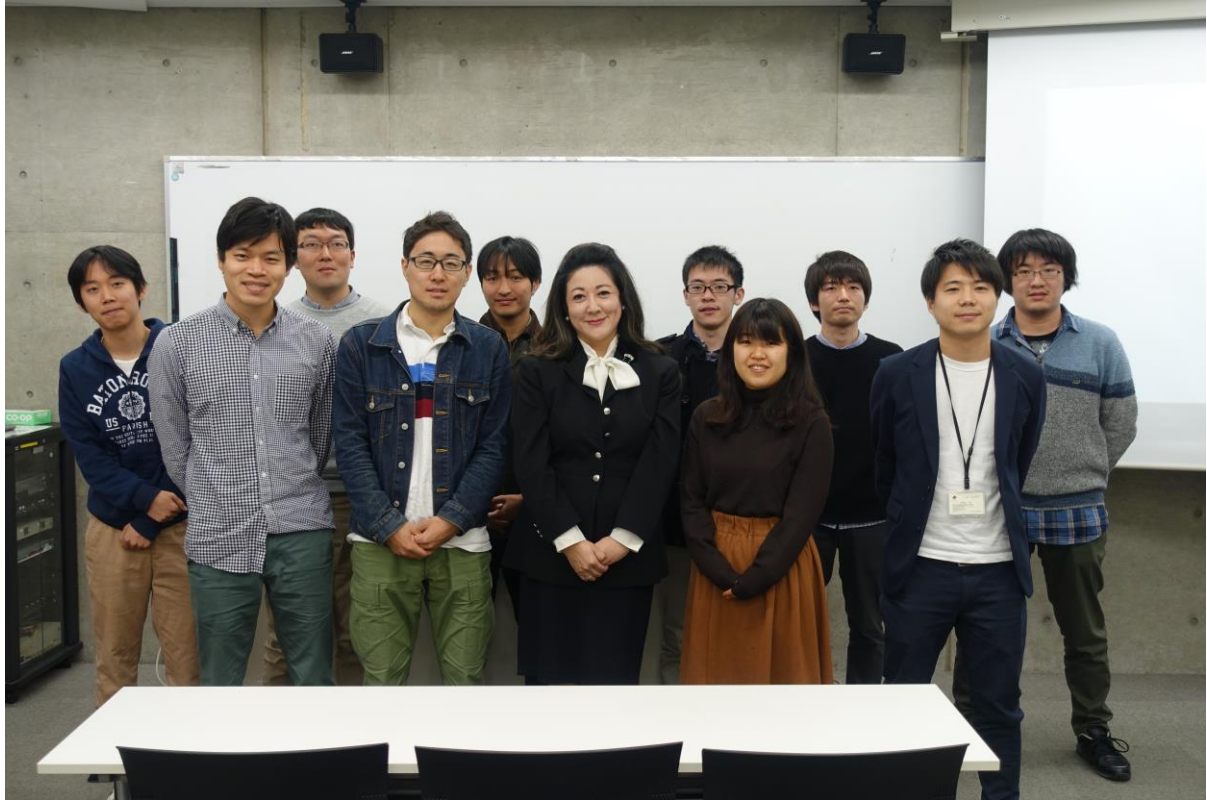
昔、国際化という言葉がありました。これも30年以上前から、何かにつけ国際化を進めるとか・・・国際化はもういいです。それは重要なこともたくさんありますが、その言葉だけが独り歩きしてしまうとおかしなことになってしまいます。筆はブラッシュという必要もない。形から入ろうとすることも独り歩きの例です。国際化という言葉が少しほころびて古めかしくなってきたら、今度はグローバル化というようになりました。似た意味ですがけれども、グローバル化が必ずしもいいわけではありません。低学年の小学校、中学校では、英語の教育よりも国語の教育ではないかと、私は思っている人間です。コミュニケーション能力イコール外国語ができるということではないというところが、どうしてもこの国では理解されません。言われて、一度理解しても、またそこに話が戻ってしまいます。そのギアチェンジをしていく。今や日本語対英語ではないのです。いろいろな国の言葉を日本にいながらにして頻繁に耳にするようになりました。私自身、中国語を習いだして数年になります。それは単なる言葉です。中国の方とお会いしたときに、あいさつ程度でも中国語ができれば、好感を持ってくれるかも知れません。心が開いてから肝心なことをコミュニケーションする。肝心なことを伝える、発信するときにスコーンと入りやすい、少し門が普通よりも広く開く。そういうことです。ですから、連鎖反応のように全部つながっているのです。そう考えて、英語が堪能になればコミュニケーション能力が高いというわけではないということをお少し考えてみてほしいと思います。

他にありますか。きょう、そちらの女性、紅一点ですね。何か意見はありますか。

Q4：具体的に、私たちがこれから日本人としてのアイデンティティーを持って発信力を高めるときに、私たちができる具体的なことは何か、お考えはありますか。

A4：ベーシックなところからお話しすると、まず、ものおじをしなくて、全然知らない人とも話をするという習慣を付けるということです。それは、場所や相手などのTPOを考えないと、思わぬ結果が生まれてしまうといけません。例えばゼミの集まり、合コンとい

うのでしょうか、そんなことでも、年末ですから忘年会でも何でもいいです。人が集まる所で、知っている人とだけ話すのではなく、知らない人にまず話し掛けるということ、勇気を持ってやっていただくと、それが習慣化して、何でもなくなります。最初はすごくハードルが高いと思うでしょうけれども、知らない人と話をすることをどんどん重ねていくと、どこの国に行っても、どんな会に行っても大丈夫になります。大丈夫な自分ということは、イコール根拠のある自信を持っているわけですから、これを発信しようと思ったことが少したやすくできるようになるはずですよ。トライしてみてください。



講師と参加学生